

## 『説得』：不確かさという可能性の発見

*Persuasion* : New Possibilities from Uncertainty

入野 賀和子

Kawako Irino

1815年3月に『エマ』を書き上げたジェイン・オースティンは、その4か月後には最後の完成された作品となる『説得』の執筆に取りかかっている。そして翌年の8月には最後の章の書き直しが行われ、『説得』は完成する。<sup>①</sup>1811年2月から1816年8月までの5年間は、作家としてのオースティンにとって最も充実した実り多い期間であったと言える。<sup>②</sup>この5年間のうちに、20代前半に書き上げられ折に触れ手を加えてきた2作品（『分別と多感』、『自負と偏見』）が出版の運びとなり、また新たに完成したばかりの作品（『マンスフィールド・パーク』、『エマ』）も次々と世に送り出されることになる。つまりこの5年間にオースティンの作家としての活動の成果が凝集されていると言っても過言ではないだろう。初期の作品から『エマ』に至るまでには、ほぼ20年の年月が経過しているが、執筆時期のこれほどの隔たりにもかかわらず、オースティンの関心は一貫して若い女性、17歳から21歳ぐらいまでの所謂結婚適齢期の女性が結婚に至る過程で経験する自己認識の問題に向けられている。ところが、『エマ』と『説得』との間には、執筆時期の時間的な近接にもかかわらず、作者の視点が大きく変わろうとしていることを予感させるほどの隔りがある。『説得』の女主人公アン・エリオットは27歳、しかも8年前に母親代わりの女性に説得され婚約を破棄した経歴を持つ人物として設定されている。社会的にも経済的にも裏付けのない結婚の無分別さを指摘され、19歳で自ら下した婚約破棄という選択がその後も密かな後悔となつてつきまとい、徐々にその若さと輝きを失いつつある女性が主人公である。

オースティンにとって、27歳という年齢は特別な意味を持つ年齢のように思われる。母親亡き後ケリンチ館の女主人として君臨し、29歳になった今も昔と変わらぬ美貌と若さを誇るエリザベス・エリオットは、その絶対的な自信とは裏腹に自分が「危険な年齢」に近づきつつあることに内心穏やかならぬものがあり、父親の愛読書の『準男爵名鑑』の中の、彼女の結婚に関して書き加えられるべき箇所が相変わらず空白なままであることに苛立ちを感じている。27歳はまさにオースティンにとってこの「危険な年齢」、結婚と出産の可能性の閉ざされる人生への確実な第一歩の意味合いを帯びている。実際オースティンの作品には27歳の女性についての言及がしばしば見られる。取り立てて美人と言うほどでもなく、財産もない27歳のシャーロット・ルーカスは、「私はロマンチックな人間じゃないわ、そんなことこれまで一度だってなかったわ。私はただ快適な家が欲しいだけなのよ」<sup>③</sup>と、愛情のない結婚であろうと、結婚が「体裁のよい生活手段」を与えてくれることには変わりなく、また27歳という年齢でそれを手に入れられたのは全くの幸運だと感じている。一方まだ17歳の、ロマンチックな人間そのもののマリアン・ダッシュウッドにとっては、27歳の女性はもはや本物の愛情とは無縁な存在であ

り、「二十七の女性が愛したり愛されたりすることなど二度と望めないし、それにもしそんな女性にとって実家の住み心地が悪かったり財産も大してないような状況なら、妻としての生活保障と安全を得るために看護婦役を甘んじて引き受ける気になるかもしれないわね」<sup>④</sup>と、27歳の女性にとっての結婚はお互いの「便宜上の契約」に他ならないと決めつける。またオースティン自身に関しても、27歳という年齢のもつ意味合いを十分考えさせられたであろうエピソードが残されている。あと2週間ほどで27歳の誕生日を迎えようとしていた1802年12月2日、5歳年下の男性から結婚の申込を受け、一旦は承諾するが翌日それを撤回したというものである。<sup>⑤</sup>どのような気持ちでそのような行動をとったかについては、オースティン自身何の記録も残していないので想像の域を出ないのだが、少なくとも一旦は結婚の申込を受け入れたという事実は、彼女の中に結婚に対する心の揺らぎがあったことの証と言えるのではないだろうか。滞在先の友人宅の、しかもその屋敷の相続人であるという相手の男性の立場は、様々な状況を考慮してもオースティンにとって安定した生活を約束してくれる、魅力的な誘因となったはずである。しかし、実際には翌日受諾を撤回し、ほとんど逃げ帰るようにその屋敷を後にしている。後に姪のファニーに宛て「愛情のない結婚をすることに比べたら、どんなことだつてましですし、耐えられるはずです」<sup>⑥</sup>という忠告の手紙を書き送っているオースティンであるならば、シャーロット・ルーカスのような選択はできなかつたものと思われる。

オースティンは『説得』の中で、それまではいささか皮肉と刺を込めて描いていた27歳という年齢を真っ向から取り上げ、この微妙な年齢にある女性の心のひだを丹念に描き出そうとしている。そしてこの作品が、アンとウェントワースが再会し結婚に至るまでの7か月余りの間の出来事を扱いながら、オースティンの他のどの作品にも見られないほどの深みと広がりを感じさせるのは、8年という年月の流れを持ち込んだことである。27歳のアンを描きながら同時に8年前のウェントワースとの恋のいきさつに常に立ち返って行くことにより、アンの人生と彼女を取り巻く社会の二つのレベルの時間が交錯し合い、うねりとなって流れている。オースティンは『説得』において、ひとりの人間に流れていく時間そしてその人間を取り巻く社会に流れている時間との関連の中で、女性の生き方をとらえ直そうとしているように思われる。主人公のアンに関してオースティン自身「私には立派すぎるくらいだ」<sup>⑦</sup>と言っているように、アンはオースティンのそれまでの作品に登場する、自らの欠点に気付かされることにより成長を遂げる女主人公とは一線を画している。アンは冷静に自分や周囲の人間を判断できる成熟した大人の女性であり、その行動も思慮に富むものである。しかしこのように「立派なアン」でありながら、27歳のアンは自らの存在意味を見失いかけている。自分の確固たる居場所を確立できないという意識がアンを人生の傍観者にしてしまっている。オースティンは『説得』の中で若い女性の自己認識というテーマからさらに踏み込んで、女性にとって主体的な生とは如何なるものかということ、アンの復活と再生を通して描き出しているように思われるのである。本論では人生の傍観者から主体者へというテーマで、時の流れとを関連させながら追ってみたい。

『説得』は、時の経過を作品に持ち込むために時代設定が厳密になされている。舞台を『説得』執筆の前年の1814年に設定することで、オースティンはそれまでの作品には見られなかった同時代性を作品に持ち込み、まさしく現在という時間を写しとろうとしている。ナポレオン戦争が国中に影を落としていた1806年から1814年までの8年間という時代を背景に、それぞれ

## 『説得』：不確かさという可能性の発見

の人間に流れていく時間、さらにまたその人間を取り巻く社会に流れている時間をもたらず変化を描き出そうとしているように思われる。『説得』は、エリオット家の詳細な出生録の描写から始まっている。オースティンは作品の書き出しの部分で、その作品の基調なりテーマなりを規定する作家である。『説得』におけるこの綿密な家族の生年月日についての描写は、彼女の関心が登場人物のそれぞれの人生に流れている時間にあることを示している。17世紀から続く由緒ある準男爵家という家柄と美貌が自慢の、虚栄心の固まりのようなサー・ウォルターと長女のエリザベスは、時の流れに挑戦するかのごとく自らの若さと美貌に固執し、頑なに一切の変化を拒んでいる。周りの人々が時の経過の中で変貌し、またその変化を受け入れていく中で、彼等二人だけが立ち止まったままである。もっとも以前と変わらぬ美貌を誇り、女王然と振る舞っているエリザベスではあったが、内心では認めたくなくとも29歳という現実を忘れることはできないでいた。時間による変容を拒絶したようなサー・ウォルターとエリザベスにとって、もうすでに若さと輝きを失いつつあるアンは、彼等にとっては何の興味もかきたてないほとんど無のような存在である。収入を上回る無思慮な浪費を重ねたあげく負債がかさみ、屋敷を他人に貸し出さざるを得ない状況になっても、「ただのアン」でしかない彼女は父親や姉からも相談相手として意見を求められることもなく、家族の中においてさえも自らの存在意味を実感することができず、ただ成り行きを傍観するのみである。作品の冒頭から主人公のアンは完全に疎外された存在として登場する。

オースティンのそれまでの作品にあっては、姉妹間の細やかな愛情が主人公の成長と密接な関連をもって描かれてきている。ベネット家のジェインとエリザベスの姉妹や、ダッシュウッド家の姉妹は強い愛情で結ばれているし、エマ・ウッドハウスやファニー・プライスに関して姉や妹との関係は家族という絆を強固にするための大きな要因となっている。この姉妹間の良好な関係が互いに影響し合い教育し合うことを可能にし、成長することによって彼女達の倫理的な優位性の確立につながっていくのである。しかし『説得』では、主人公アンを巡るこのような親密な姉妹の関係は全く姿を消してしまっている。アンとエリザベス、メアリの三姉妹の間にあるのは、冷やかな無関心や競争心であり、お互いに対する理解と許容の完全な欠如である。アンとメアリの間には、メアリがアンに関心と愛情を要求することで、かろうじて姉妹としての繋がりが保たれているが、これは互いに影響し合い成長していく関係からは程遠いものである。姉妹の良好な関係が互いを受け入れ教育し合う機会を与えるということは、外の世界においても他者を受け入れる受容への素地をもたらしにつながっていく。ところが『説得』にはこのような互いに補足し合いながら成長するような姉妹関係は存在せず、アンが経験するのは絶えざる疎外感である。そしてエリザベスやメアリからは、他者への共感や受容の可能性は完全に締め出されている。

アンは父親とも姉妹とも愛情ある絆を結ばずに深い孤独に包まれている。そしてサー・ウォルターやエリザベスが、時の流れに目をつむり一切の変化を拒んでいる人間だとすると、アン意識は絶えず過去に立ち返り、彼女の目は過去ばかり見つめている。8年前のウェントワースとの婚約破棄への後悔が、彼女の未来を奪い去り、時が流れるがままに身を任せている人生の傍観者の立場へと追いやっている。エリザベスも過去において、ケリンチ館の推定相続人であるエリオット氏との結婚への期待を裏切られた苦い思い出があったが、財産目当てに身分の低い女性と結婚するという形での彼の拒絶は、エリザベスに誇りを傷つけられた怒りを残しただけであり、彼女の内面生活は何ら影響を受けていない。また長女であるエリザベスは、母親

亡き後ケリンチ館の女主人として思いのままに振る舞える立場を手に入れている。それに対してアンは自らの確固たる居場所を持たない人間として、不安定な人間関係の中に置かれ、様々なグループに属しながら移動していく。一家がバースへ引っ越して行った後、妹メアリの話し相手としてマスグローブ家に滞在することになるアンの立場は、まさしく婚期を逸しつつある「やさしい未婚の叔母」のそれである。メアリの二人の子供達のやさしい叔母として、メアリと彼女を取り巻くマスグローブ家の人々の不平不満に耳を傾け、お互いへのとりなしをする。アンは「何かの役に立つからと求められるほうが、全く役に立たないと拒絶されるよりはましである」<sup>8)</sup>と、自らのささやかな有用性に存在意味を見出そうとする。

アンはひとつの家族から別の家族へと移ることの意味を、またそれぞれの家族にはその家族独自の関心事があり、自分の仲間以外の所では自分が如何に無に等しい存在であるかを改めて実感させられる。アンは自らの立場を、別の小国に移住させられた移民に例えている。

マスグローブ家の男たちは、鳥獣を保護したり猟銃で仕留めたり、また馬や犬の世話をしたり新聞を読んで時を過ごし、女たちは家政や隣人たち、衣装や踊りや音楽といったよくある話題に専心していた。アンはどんな小さな国もその国独自の話題を決めるのが一番ふさわしいことだと認めていた。そして遠からず自分も今移住させられたこの国にふさわしい一員になりたいものと思った。少なくともアップパークロスで二か月は過ごす予定だったので、自分の想像力や記憶や全ての考えをできる限りアップパークロス風の衣で包むことが何よりも彼女に求められていることだった。(44)

小さな国を渡り歩く余所者のアンに求められていることは、すみやかにその場所に適応し順応していくことである。

この27歳の未婚の女性という立場は、ウェントワースとの再会ではっきりとその現実の持つ意味が思い知らされる。31歳のウェントワースの結婚相手として誰もが期待を寄せるのは、19歳と20歳のルイーザとヘンリエッタの姉妹であり、アンはもはやそのような対象とは成り得ない存在である。アンは二人の姉妹がウェントワースと親しさを増していくのを目の当たりにしながら、まさしく8年前の19歳の自分の姿をだぶらせて見ている。アンにとってこの8年間は結婚への可能性からの撤退を意味するが、海軍での出世と富を手に入れたウェントワースにとっては、より良い結婚の可能性の増大を意味している。それまでのオースティンならば、結婚に反対する母親代わりの敬愛する女性からの説得と、相手の男性への愛情との間で揺れ動く19歳のアンを主人公に、より良い結婚とは何かというテーマで手際良く一つの作品に仕上げていることであろう。ところが『説得』は、いわばその続編とも言えるような作品である。8年という年月は、アンとウェントワースの結婚市場における立場を完全に逆転させ、8年前にはまだほんの子供だったルイーザやヘンリエッタが結婚市場の主役に躍り出てきている。未来への可能性に満ちたルイーザ達の屈託のない陽気さと、背景に押し遣られひっそりとたたずむアンの悲しみが痛ましいほどの対照となって描き出されている。

『説得』は出会いから結婚へと、お互いの理解を積み重ねていくような通常の筋の運びとは逆行するような展開がなされ、一度は婚約しながら別れてしまった二人の、言わばわだかまりの解けない負の関係からの出発という形をとる。アンと再会したウェントワースは、アンの意志の弱さを責め、誇りを傷つけられた怒りから彼女を許せないでいる。

## 『説得』：不確かさという可能性の発見

二人は語り合うこともなく、ごく普通の礼儀上必要なこと以外には何の交流もなかった。かつては、お互いあれほどまでに大切な存在だったのに！今は何もなかった！…これほど心開き、これほどまでに趣味が同じで、これほど気持ちが通じ合い、これほど愛し愛された顔は他には見出せなかつただろう。それが今ではまるで見知らぬ者同士のような、いや、それよりももっと悪い、二人は近づきになることもできないのだから。そこにあるのは永遠の疎隔だった。(63)

しかし二人は日常的に顔を合わせるにより、アンはウェントワースの態度が冷ややかな礼儀や仰々しい丁重さから少しずつ平静な無関心さの装いへと変わり、さらにアンが疲れたり困っているときに何気なく差し出される彼の手助けに、以前の感情の名残とも言うべき彼自身認めてはいないが、純粋な友情の発露を見出すようになる。このような状況でルイーザのライムでの事故が起こり、この事故を境に二人の立場が逆転し始める。オースティンの作品の中で、これほどまでに激しく恋する女性の心情と喜びを描き出したものは他には見当たらない。オースティンの伝記を書いたトマリンは、この作品がある面ではオースティン自身や姉のカサンドラ、友人のマーサ・ロイドのような「人生のチャンスを逃がしてしまい、二度目の春を謳歌することのできなかつた全ての女性達への贈り物の意味合いを持っている」<sup>(9)</sup> と言っているが、まさに過去を取り戻すという叶わぬ願望実現への夢が込められている。「二十七の女性が三十五の男性に対して、彼のことを望ましい伴侶に思えるくらい十分愛情に近いものを感じることは有り得るのよ」<sup>(10)</sup> と言うエリナ・ダッシュウッドの弁護以上に、27歳のアンは17歳のマリアンにも負けないほどの激しい愛情があることを証明して見せる。すべてがアンの内省を通して語られるために、アンへの想いの深さと激しさはそれだけ効果的に伝わってくる。

この作品においては、自らの頑なさや傷つけられた自尊心から真実を見極められず、自らが自らの幸福への道を阻む敵となっていたことを思い知らされるのは、ウェントワースの方である。さらにライムでの事故の折、混乱の中で冷静な対応を見せるのは、ウェントワースではなくアンの方である。オースティンはアンを「立派すぎる」ほどの女主人公だと語っているが、同じようにその道徳的優位性ゆえに、時には「とりすましたお堅い女偽善者」<sup>(11)</sup> と言った手厳しい批判を浴びせられることがあるファニー・プライス像とは異なり、アンは成熟した受容の精神を体現した人物である。アン自身が疎外され、内に哀しみを抱えた存在であり、他の人の幸不幸に共感をもって反応できる人物として造型されている。男性の主人公の方が改めて自己認識を迫られるという構図は、それまでのオースティンの作品の女主人公の立場と逆転して、アンが主導権を握って巧みにウェントワースを導いていくという展開をたどることになる。ルイーザとベンウィック大佐の婚約という、思いがけない形でウェントワースがルイーザへの責任から解放されて以降、アンはあくまでも慎ましく、しかし主体的にウェントワースとの和解への道筋を模索する。美しくも哀しさが漂う秋の田園風景の中で展開される前半部から一転して、バースを舞台に恋するアンの一喜一憂を描き出す後半部は軽やかなからかいに満ちた調子へと変わっていく。突然バースに現れたウェントワースの姿を窓の外に見かけたときのアンへの反応を、「彼女は外側の扉のところでどうしても行きたいと思った。雨がまだ降っているかどうかを見たかったのだ。他に動機があるなどとどうして自分を疑ってみる必要があるのか」(165) と、オースティンは心得顔に擁護してみせる。あるいはまた、レディ・ラッセルとウェントワースが顔を合わせることを恐れながらも、初めて彼等がすれ違いそうになったとき、彼

のほうを一心に見つめるレディ・ラッセルを得心したように観察しているアンの姿がある。

…アンには全て手に取るように理解できた。彼の持つ魅力がレディ・ラッセルの心を捉えて離さず、夫人がどうしても彼から目を離せないでいるのだ。八、九年の年月を外国の気候風土の中で多忙な任務について過ごしながら、容貌の優雅さの一つたりとも失われていないことに夫人が驚きの目を見張っているのだ！（169）

ところが実際は、レディ・ラッセルは友人の間で素晴らしいと話題に上っていた、その通りにある家の窓に掛かっているカーテンを捜していただけたとわかる。

ウェントワースの態度から彼の愛情を確信したアンは、「全ての人々に対して丁寧に親切にしたいくなるような、自分ほどには幸せでないことで全ての人々をかわいそうだと思いたくなるような気持ちにさせる」（174）ほどまでに、その幸福感がアンを内面から輝かせる。そして生への充実感がアンの行動を再び着実に、自信あるものへと変えていく。「双方に変わらぬ愛情があれば、私達の心はいずれお互いを理解し合うことになるはずですよ。私達は少年や少女じゃないのだから、咎め立てするように苛立ったり、一瞬一瞬の不注意な間違いに惑わされ、自分達自身の幸福を気紛れに弄んだりすることはないのです」（209）と、事態を自然の成り行きにまかせようとするアンの言葉には、8年の歳月がもたらした成熟した大人の持つ言葉の重みがある。自らの望みを明確に自覚しているアンは、精一杯ウェントワースへの想いを伝えようと、最終的には彼が結婚申込をするきっかけを作ることになる。

オースティンが一貫して描いてきているのは、結婚において愛情と経済的基盤をいかに調和し両立するかという問題であり、結婚に至るまでの過程でそれぞれの登場人物のモラルが試されることになる。経済的利得のみを求める結婚はもちろんのこと、経済的基盤を無視しての愛情による結婚に対しても、実はその根底にあるのは利己的な欲望と倫理性の欠如に他ならないと、手厳しい反応を示している。それに対して倫理的優位性を確立する登場人物達は、この二つを調和させた良き結婚への道を模索する。エレン・モアズは「オースティンの小説では、結婚にとってお金が重要な問題になっている。オースティンはお金が大切だと思うから結婚が重要になってくるのである」<sup>(12)</sup>と言っているが、『説得』においてはそのようなオースティンの考え方が少しばかり転換しようとしているようである。言ってみれば、「結婚にとってお金は大切だが、愛情はそれ以上に重要な要素である」と考え始めているように思われるのである。そして愛情を分別という少し窮屈になった衣から、解き放とうとする試みを始めたように見える。「彼女は若い頃に分別をもって振る舞うよう強いられ、年をとるにつれてロマンスを学んだ。不自然な始まりの自然な結末であった」（33）という有名な一節には、オースティンのそのような姿勢の変化が込められているように思われる。

準男爵家の娘であるアンと、社会的地位も財産もなく将来の出世も定かではないウェントワースとの婚約を、母親代わりのレディ・ラッセルは軽率で不適切な選択だと断固反対する。レディ・ラッセルにとって、経済的独立の保証を伴わない結婚は無分別な結婚以外の何物でもない。19歳のアンは「良き結婚」の規範に則って慎重に行動したことになるが、彼女にとって人生で唯一の選択の機会を下した判断が、その後の人生を奪ってしまうことになる。19歳のアンと、その後ウェントワース以上に愛せる男性は二度と現れず、後悔につきまといわれている27歳のアンとの間には、明らかにその視座に変化が起こっている。アンはもし19歳の時の自分と同

## 『説得』：不確かさという可能性の発見

じような状況にいる若者から助言を求められたら、「人間の努力を軽んじ神の思し召しを疑うような、余りにも慎重な用心深さを求めるよりは、若き日の熱烈な愛情と未来への明るい希望を信じたほうが良い」(33)と、たとえ不確かでも将来に賭けることを勧めるだろうと述べている。愛情という、心の内から湧き起こる自然な感情の発露の真性さへの信頼が表明されている。オースティンが『分別と多感』で描こうとしたテーマが、形を変えて「分別と情熱」という対比で再び取り扱われている。

『説得』は、27歳のアンに焦点をあてて語られながら絶えず8年前へと立ち返っていく構造になっているが、興味深いのは19歳のアンに決定的な影響を与えたレディ・ラッセルの扱い方である。レディ・ラッセルの影響力が常に陰のようにこの作品を覆っているが、実際にはレディ・ラッセルが登場する場面は少なく、ほとんど背後に追い遣られた扱いがなされ、また彼女の会話が重みをもって書き留められている場面もほとんどない。賢明で分別のある絶大な影響力を持つ女性としてのイメージが人々の間を一人歩きし、周りから少しばかり恐れられ、あるいはその影響力が過大視され、ヘンリエッタからは恋人が代理牧師の職務に就けるよう影響力を行使することを期待されたりする。ところが皮肉なことに、レディ・ラッセルの実際の影響力は無いに等しい。経済状態を立て直すためのレディ・ラッセルの案はサー・ウォルターにもエリザベスにもことごとく却下される。27歳になったアンは、レディ・ラッセルに変わらぬ敬愛の念を抱きながらも、もはや彼女の内面生活に深く関わっていることに夫人の助言を求めることはない。さらにまたアンは、レディ・ラッセルの判断と自分の判断が必ずしも同じではないことに気付き始めている。ケリンチ館の推定相続人であるエリオット氏に関して、分別や堅実さを何よりも重んずるレディ・ラッセルは、彼の分別や理解力、穏健で堅実な考え方ゆえに彼を高く買っているが、アンは彼が誰に対してもそつなく振る舞う愛想の良さに彼の偽善を感じ取っている。

…アンは率直で、あけすけな熱意ある性格の人を他の誰よりも高く評価していた。熱意や熱情は今でも彼女の心を捉えた。いつも変わらぬ平静さを保ち、うっかり口を滑らすことのない人達よりも、時には不注意なあるいは性急な事を言ったり、そのような人間に見えたりする人々の誠実さのほうに、もっとずっと信頼を置いていた。(152-53)

アンは理性的で洗練された慎重さよりも、喜んだり憤慨したりと内から湧き起こる自然な感情のほとばしりに、より価値を見出している。アンがウェントワースに惹かれたのも、その熱意や熱情の中に彼の感情の真性さや誠実さを感じ取ったからである。マリアン・ダッシュウッドが直感的な内なる声の持つ真実を信奉したように、アンも何物にも縛られない内なる感情の中に真実があることを感じ取っている。オースティンは、愛想の良いそつのな裏に潜むエリオット氏の欺瞞性を暴くことにより、レディ・ラッセルの洞察力の限界を提示している。そしてオースティンは、経験によって得られる分別よりも、一瞬のうちに人間や物事の本質を見抜いてしまうような「生まれながらの洞察力」(“a natural penetration”)、すなわち直感的な認知能力のほうに、より真実を見極める力があると考え始めているように思われる。

洗練された冷静さよりも、分別で縛られない自然な感情の発露に価値を置く姿勢は、レディ・ラッセルとは対照的に取り扱われている、アンの学校時代の友人であるスミス夫人の描写にも現れている。レディ・ラッセルがアンへの絶大な影響力を持つ、重要な登場人物であるか

のような導入をされながら、実際には物語の背景に追い遣られ、陰のような存在としてしか扱われないのとは対照的に、スミス夫人は何気無くそして大して重要でもなさそうな人物として登場しながら、エリオット氏の正体を暴露することで、アンの洞察力の正しさを証明する役割を担わされている。スミス夫人は御人好しの決して賢明とは言えない夫と共に贅沢三昧の生活を送り、夫亡き後は経済的窮乏状態に陥り、しかも病気のために一人では歩くこともできず、ほとんど世間から隔離されたような状況にある。このような悲惨な状況にありながら、好奇心旺盛で生への活力に満ちているスミス夫人は、現実受容に対する柔軟な対応力を持った人物として描き出されている。レディ・ラッセルの体現する世俗的な思慮分別とは異なった、同じく世俗的でありながらのびやかな精神力で苦難を楽天的に快活に乗り切っていく、このような精神の柔軟さを「神から与えられた選り抜きの贈り物」(146)と呼び、他の全ての足りない物の埋め合わせをするほどのものと表現されている。オースティンが、賢明で世間知に富み慎重さを求める分別に少しばかり窮屈さを感じ、「天賦の希有な才能」とも言うべき柔軟な精神力の持つのびやかさに心ひかれているのは明らかである。

『説得』では、それまでの作品に見られたような財産や経済的状况に関する記述が減っている。サー・ウォルターの収入や財産の具体的な金額の描写はもちろん、マスグローブ家やクロフト提督の資産状況についても明確な金額は述べられない。具体的な数字が挙げられているのは、ウェントワースの資産が2万5千ポンドであることと、アンの持参金が1万ポンドであるといった個所だけである。結婚と経済という問題にこだわり、遺産や持参金や収入や利子までも含めた詳細な経済的状况が描き込まれている『分別と多感』とは対照的に、『説得』ではそのような資産状況への執拗なまでの関心は影を潜めている。限嗣相続制のためにケリンチ館は親類のエリオット氏に引き継がれることになるという状況はベネット家の場合と同じだが、サー・ウォルターや娘達はその現実を当然のこととして受け取り、ベネット夫人のようにその理不尽さを嘆くこともない。もちろん最終的にはアンとウェントワースは、経済的裏付けのある愛情に基づいた良き結婚に至るのだが、オースティンの関心は経済的裏付けの確実さを前提にすることよりも、愛情が根底にあればたとえ不確かでも、未来の可能性に賭けるほうに移ってきているように思われる。そしてそのような努力による将来への展望を可能にしているのは、まさにこの作品の舞台となっている時代、ナポレオン戦争というヨーロッパ中を巻き込んだ政治的にも経済的にも流動している時代の変化だったと思われる。土地を基盤とする伝統的な地主階級を中心とする固定した社会から、サー・ウォルターの軽蔑する海軍軍人のような新興階級の抬頭する社会へと移りつつあり、才能と努力により富を手に入れることが可能な流動的社会へと変貌しつつあることを、オースティン自らが実感していたからではないだろうか。

この作品では、サー・ウォルターに代表される貴族及び上流階級、マスグローブ家に代表される農業経営の成功者としての地主階級、そしてクロフト提督に代表される海軍軍人という大きく分けて三つのグループが登場する。この中で最も痛烈な批判が加えられているのがサー・ウォルターである。世の中の変化に背を向け地主としての責任を果たすこともなく、過去からの遺産を引き継ぐだけで新たな変化に対処する能力に欠けるサー・ウォルターは、もはや時代への対応力を失ってしまった人間として表舞台から退場する運命にある。一方、三世代にわたる大家族が雑然と寄り集まって暮らす地方地主のマスグローブ家は、多産と繁栄を象徴している。昔ながらのどっしりとした屋敷のそばには、息子夫婦のベランダやフランス窓のある近代的な別邸が加えられ、古風な英国式と若い世代の新しい英国式が雑然と混ざり合い、時代の変



## 『説得』：不確かさという可能性の発見

化に歩調を合わせて変容を遂げている。マスグローブ家が、古風な英国風のやり方に巧みに新しさを取り込んで、時代の波に乗っていくグループを代表しているとすれば、クロフト提督に代表される海軍軍人達は、自らの才能や才覚だけを頼りに時代の変化に即応し、成功への可能性に賭けようとするグループである。彼等の夢を実現可能にしているのは、まさに戦争という時代の波である。オースティンは時代の変化への対応という観点から、これら三つのグループを描き分けている。そしてオースティンがこの作品で何よりも関心を示しているのは、時代の変化に柔軟に対応し得る能力である。そのような能力に欠ける人物に対しては、苛立ちにも似た容赦ない調子で冷たく突き放した描き方がされている。そしてそのような容赦のない批判の対象となるのが、「神によって与えられた地位を維持していくだけの道義も分別も持ち合わせていない、愚かで浪費家の準男爵」のサー・ウォルターである。

…アンは実際にクロフト夫妻を高く評価していて、彼女の父がこのような借地人を得られたことを非常に幸運だと考えた。この夫妻が教区の人々には良い規範を示し、また貧しい人々には行き届いた世話と救済の手を差しのべるであろうことを確信していたので、自分達が引っ越さざるを得なくなったことをいかに残念で恥ずかしいことだと思ったとしても、留まるに値しない者が去り、ケリンチ館はその持ち主よりも立派な人々の手に渡ったのだと心から感ぜずにはいられなかった。(119)

あるいはまた、マスグローブ家の息子の「陸では愚鈍で手に負えなかったので、海軍に送られ…運良く二十歳に達する前に亡くなった」リチャードも、時代の波に対応する能力も才覚もない者として、作者によって素っ気無く切り捨てられている。「頭の鈍い思いやりの無い役立たずのディック・マスグローブは、生きても死んでも、自分の名前のリチャードを短くディックと呼ばれるぐらいがせいぜいの人間に過ぎなかった」(52)と、ユーモアのかけらもない突き放した調子で片付けられる。ファラーの言うように、作者の登場人物への好悪がくっきりと色分けされ、<sup>(43)</sup>無能な好ましくない登場人物には冷ややかな軽蔑を、好ましい登場人物にはどこまでも愛情を込めた描き方がなされている。オースティンは、伝統や安定を重んずる固定した階級社会に変化が起り始めていることを感じ取っている。そこにはある種の競争原理が入り込み、個人の能力や未知の可能性といった不安定要素に賭けることが、無謀で無分別なことと断定し切れない新たな価値観が生まれつつあることに目を向けている。それはまた、8年前には経済的裏付けのない結婚を無分別と言わせた価値観に対し、そのような結婚を無分別とは断定し切れない新しい価値観の誕生でもある。アンは母親代わりのレディ・ラッセルの説得に従ってウェントワースとの婚約を破棄したことを、その時点では正しい選択だったとしながらも、それからの8年という歳月の経過が彼女に「助言が正しいか間違っているかは、結果によってのみ判断できる場合がある」(232)と言わせることになる。アンを取り巻く社会は、安全と安定を志向する用心深い分別の窮屈さから、未来という不確定要素に賭ける冒険に着実に踏み出していると言えよう。

『説得』は、それ以前の作品に見られるような、面白がって登場人物と戯れると言った傾向が姿を消し、対象物と少し離れて立つことにより、これまでと違う視点でこの世界を見直そうとしているようである。喜劇的人物に対する陽気なからかいは消え、どこか突き放したような姿勢が感じられる。好悪の感情がくっきりと色分けされ、暖かさと素っ気無さが混ざり合い、

オースティンの作品の中でも「最も暖かくまた最も冷たくもある」<sup>(14)</sup> 作品という印象を与えるものになっている。しかし同時に「これまで一度も試みたことのない何かをしようとしている」<sup>(15)</sup> と感じさせる新しい要素もある。ウルフは「彼女は这个世界が想像していたよりも、もっと大きくもっと神秘的でもっとロマンチックであると発見し始めている」<sup>(16)</sup> と語っているが、オースティンは彼女が得意とする穏やかな安定した世界から、未知の不安定要素を抱え込んだ新しい世界へと踏み出しているように思われる。それはまた、オースティンという作家が、時代の変化に決して無関心ではなかった証とも言えるのである。

注

- (1) Halperin, John, *The Life of Jane Austen*, Sussex: The Harvester Press Ltd., rpt., 1986, p.278
- (2) Austen-Leigh, James Edward, *A Memoir of Jane Austen*, London: Century Hutchinson Ltd., 1987, pp.101-02
- (3) Austen, Jane, *Pride and Prejudice*, Oxford University Press, rpt., 1987, p.113
- (4) Austen, Jane, *Sense and Sensibility*, Oxford University Press, rpt., 1984, p.32
- (5) Austen-Leigh, William & Austen-Leigh, Richard Arthur, *Jane Austen: A Family Record*, ed. Le Faye, Deirdre, London: The British Library, 1989, pp.121-22
- (6) Austen, Jane, *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others*, ed. Chapman, R.W., Oxford University Press, 2nd ed., 1969, p.410, No.103. ファニー・ナイト宛、1814年11月18日
- (7) *Ibid.*, p.487, No.142. ファニー・ナイト宛、1817年3月23日
- (8) Austen, Jane, *Persuasion*, Oxford University Press, 1980, p.36. 本書からの引用は以後、本文中にページ数のみを記す。
- (9) Tomalin, Claire, *Jane Austen: A Life*, New York: Alfred A. Knopf, Inc., 1998, p.256
- (10) Austen, Jane, *Sense and Sensibility*, p.32
- (11) Farrer, Reginald, "Jane Austen's *Gran Rifiuto*" in '*Sense and Sensibility*', '*Pride and Prejudice*', and '*Mansfield Park*', Casebook Series, ed. Southam, B. C., London: The Macmillan Press Ltd., 1982, p.211
- (12) Moers, Ellen, *Literary Women*, New York: Anchor Press / Doubleday, 1977, p.102
- (13) Farrer, Reginald, "One of Fiction's Greatest Heroines" in '*Northanger Abbey*' and '*Persuasion*', Casebook Series, ed. Southam, B. C., London: The Macmillan Press Ltd., 1976, p.148
- (14) *Ibid.*, p.148
- (15) Woolf, Virginia, *The Common Reader, First Series*, London: The Hogarth Press, 1984, p.143-44
- (16) *Ibid.*, p.144